

一方…、
クレヨンを持ち主である人間は、落としたアイのことにはまだ気づかず、黙々と自然の色に向き合っておりまして。

《今朝は、朝日を描きに出かけたが描かずに、暫く観察することにした。…色の変化は何段階かに区切られて…、徐々に明るさを増しながら次第にそれは虹の階調を登るように…黄色から赤へと向かって、エネルギーを増しながら高まり、それは昼頃に最高潮に達すると…午後からは次第に下りながら赤紫から紫へと変化して行くことが分かる。しかもそれは、各色の段階で、たとえば…黄色の基調色の中には虹の変化がありその一つ一つの色の変化の中にも、さらなる虹の階調が感じられる…。それは限らない虹の連鎖である。そして又それは、観察している場所が、只そのように見えているのではなく…その周りの色の影響により、そのように現れて見えている。…つまり、その部分が明らかに観察できるようなかたちとして見えているのではなく…それは、全体の関わりの中で変化しているのである。そして…、この全体とは、まるでそれが一つの生命の姿の現れであることを教えているかのようだ!!



…そこで今日は、黄色↓紫↓青↓赤↓オレンジ↓緑へと進んでみた。或いは…、

黄色↓青↓赤↓紫と、従来のように進んだところで、……《その試みは、来る日も来る日も繰り返されました。

一方、辺りが暗くなって、突然空から水玉が降り出すと、濡れる心配などはないのに、アイは思わず草陰の中に潜り込んでしまいました。

—水玉が止んで…明るくなって行く空を見上げてアイは息を吞みました。

灯台の向こう…高い大空に、色とりどりに輝く光の架け橋が現れたのです—

「ウワーツ！あれは何！？」アイは思わず叫びました。

生まれて初めて見る光景に、それ以上の言葉が出てきませんでした。

「—なんだい坊や、虹も知らないのかい？」

灯台は振り向きもせずに行いました。

「うわ—あああ、あれが虹！—」

アイは、我を忘れて見とれました。

そこには、アイと一緒にいたクレヨン達と同じ色が、輝く姿でありました。

「なんて…なんて綺麗な色だろう！それに、なんて大きいんだ！美しいな…！そうだ。この虹をみんなで描こう！そしたら—みんな仲良くなれるに違いない！だって！世界中のみんなが、感動してくれるに違いないから！—」

すると…、アイの独り言を聞くともなく聞いてしまった灯台が突然笑い出しました。

「ハハハハ—…あははは—っ」それは灯台にとって、生まれて初めての出来事でした。

「ご、ごめんよ坊や。—こんなの初めてだったから。…坊や、虹の美しさを知らない者など、この世には居ないさ。だって神様が創り出す世界—美しい、光の芸術作品なんだから！それを…坊やが一体どうやって描くつもりなんだい？—まさか、あれを世界中に持って歩こうってでも言うのかい？—アハハハハ」その言葉を聞いて、アイはムツとなりました。

「なんだ、おじさん—。何でも知ってるって言ってたけど、僕らのことは何にも知らないんだね。—僕、クレヨンって言うんだ—僕や僕の仲間が集まれば、何だって描くことができるんだから—」

